京都・土師器皿研究の歩み

赤松　佳奈

【黎明期】

平安京遷都以降首都として発展・変容してきた平安京および中近世京都から出土する遺物の研究は、明治には瓦研究が主であった[1)]。しかし、昭和２年（1927）「右京四条二坊“淳和院”跡[2)]」発掘調査成果の報告として須恵器の杯・甕の写真が掲載されたことを始めとして、徐々に土器類が研究の対象となり、今日に至る。

上記報告は、西田直二郎氏・梅原末治氏らを委員として大正６年（1917）に発足した京都府史蹟勝地調査会によるもので、同調査会はその後、昭和４年には愛宕郡花背村で発見された経塚出土遺物実測図を「花背村の経塚[3)]」に掲載し、昭和14年「北白川廃寺址[4)]」では発掘調査で出土した土師器、緑釉陶器などに対し考察を加えた（図１）。

同調査会以外の本格的な発掘調査や土器研究は戦後になってから始まった。角田文衛氏を中心として昭和26年に結成された古代学協会は、昭和32年に姉坊城児童公園で勧学院址の発掘調査を行い[5)]、「政」の刻書がある緑釉陶器や土師器、須恵器が出土した。昭和34年には尊勝寺跡（京都会館建設工事に伴う）の調査[6)]、昭和35年からは杉山信三氏の指導で鳥羽離宮跡の調査が開始された[7)]。

昭和45年になると京都市に文化財保護課が設立されたが、文化財行政が軌道にのるまでは、古代学協会やいくつもの調査団体が中心となって発掘調査が行われた。またこの時期、坂東善平氏らの民間研究者によって、行政が対応しきれなかった工事中の出土遺物が記録・採集されたことも、後世に繰り返し伝えるべき重要な学史と言える[8)]。

昭和40年代後半には、古代学協会の他に平安京調査会、六勝寺研究会、鳥羽離宮跡調査研究所や各大学などが各地で本格的な調査を行っており、昭和49年（1974）からは、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会による地下鉄烏丸線建設に伴う調査が始まった。

昭和46年刊行の白石太一郎・伊藤玄三・近藤喬一氏による『平安博物館研究紀要[9)]』には、瓦と共に土器の実測図版が組まれ、器種ごとの考察が掲載された。また昭和51年刊行の平安京調査会『平安京跡発掘調査報告書[10)]』では、空白期もあるが平安時代から室町時代の一括資料が図示された。現在でも実年代根拠として使用される「寛治五年」（1091）銘須恵器鉢の掲載は当時の平安時代研究にインパクトを与え、古代から中世までの土器変化を掲載したことと合わせて、歴史時代の土器研究に大きく貢献したといえる。

【試行錯誤の時代】

昭和40年代後半からの本格的な発掘調査によって、古代から中世の遺構・遺物が地中に残されている事が明らかとなる。各調査団体とその担当者は、当時、先行研究のほとんど無い未解明の資

二、第一號經塚

此經塚は花背村大字別所字大平谷と稱する山林中にて、藤井勘兵衛、辻一次の兩氏、炭燒準備の際、偶然に發見したるものにて、遺跡の構造に就きては質査を經す。唯發掘者の其筋へ提出せし屆出ありて、其聞書によれば、石壘の敷地を發見し、次いで鐵刀一振發見されしを以て、石を除くに石櫃ありて其中に經筒、其他の遺物ありしと云ふ。去る大正十年同地にて發掘されし同種の遺跡に比して其構造の大體を推量すべし。

遺物品目

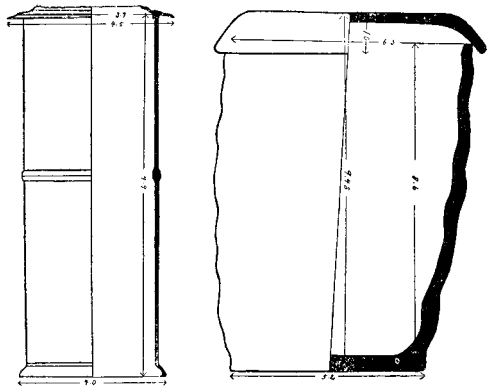
一、土製經筒外容器　一個
一、銅製經筒　一個
一、銅鏡　三面
一、白磁合子　四個
一、木製品　二個
一、素燒土器　七個
一、古錢　十四個
一、刀及劒　各一個

(A)土製經筒外容器、(同版第三插圖第四の右)

全體に鼠色を呈し薄手の粗造の圓筒狀にして、表面には輪狀痕あり。蓋身の總高九尺四寸五分あり、身は高さ八寸六分口徑六寸三分、底は平底にして其徑五寸二分厚さ四分ありて、下部に至り次第に窄る。蓋は外被の平蓋にして鈕無し。其高さ一寸、上徑五寸五分、下徑七寸二分あり。發見の際には身の下部三分の一位まで有機質の塊狀物存在せしと云ふ。

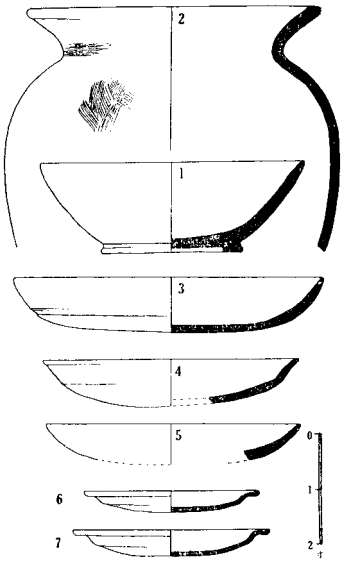
(B)銅製經筒、(同版第三插圖第四の左)

此は鑄銅製の圓筒にして一體に綠青を呈す。蓋の中央部、缺損せるを以て、總高は測り得ざるも、身は高さ九寸九分、口徑三寸七分あり。底は臺となりて開き、所謂臺底となる。筒身の中央に



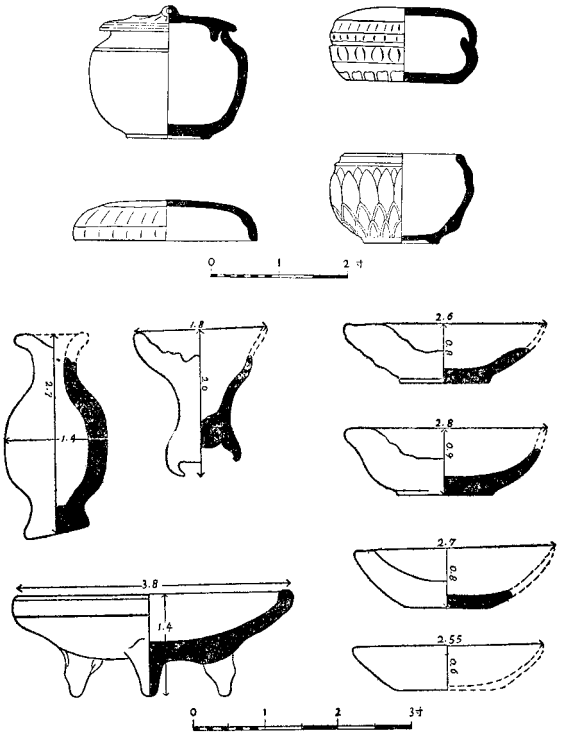
圖測實(左)筒經及(右)器容外筒經物遺塚經號一第村背花　圖四第

『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十冊 1929　より六・七頁抜粋



圖狀形類器土土出寺歳川白北　圖五一第

『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』
第十九冊 1939　より引用



圖測實器土及子合物遺塚經號一第村背花　圖六第

『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十冊 1929　より引用

図１　『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』掲載の土器実測図

料を前に悩み、多量に出土する土師器皿の研究が、京都を発掘する軸になるという認識を個々に持つようになったと推測される。こうして昭和45年から平成の初め（1970～90年代、以下時代感が伝わりやすい西暦に代える）にかけて、出土遺物の整理作業に伴う編年研究が開始された[11)]。

必要に迫られて始まった京都の土師器皿編年は、このため個別の発掘調査とその遺跡のピークの時期に制約されて始まったとも言える。

1980年には京都府埋蔵文化財調査研究センターの伊野近富氏が「内膳町遺跡」出土の土師器皿を形態の特徴で分類し、中世土師器皿の形を認識する基礎をつくった[12)]。1981年には相次いで編年試案が出される。宇野隆夫氏は「白河北殿北辺の調査」にて形態の特徴による分類と法量による土師器皿の段階変化を提示した上で、約100年の時間幅をもつ「期」を設定し、それを古中新の三段階に分け、歴史史料から推測される遺構の年代観を当てる方法を示した[13)]。宇野氏はここで「Ａ～Ｆの各類は、必ずしも時期差を示すものではなく、器種や法量によって分類した中で各類が占める比率の変化に時期差が読みとれる」と重要な指摘をしている。横田洋三氏は「出土土師器編年試案」として一括資料の中で史料上から推測される年代根拠を考察するとともに土師器皿が主に褐色系と白色系の大きな２系統に別けられ、時間によって連続的に変化していく考えを示した[14)]。横田氏は1984年「土師器皿の分類と編年観」で、Ａ・Ｅタイプ（褐色系）とＢタイプ（白色系）の大きな２系統分類を図示している[15)]。示された系統は、今日的視点で見ても大きな誤謬は無く卓越した見解であったといえる。

また1984年には飛鳥、平城、長岡などの各都城出土資料を共同で研究する動きがおこり、古代の土器研究会準備会が発足した。この研究会で各都城跡資料の比較が進み、平安時代前期の土器が奈良時代からの連続性の中で捉えられる事がわかった。紙幅の関係上、すべては紹介できないが、80年代には様々な論考が出された[16)]。

1990年になると平尾政幸氏によって平安時代前期の土器の編年案が出される[17)]。この編年案は平安時代前期の土師器小型供膳形態を軸に組み立てられた初めてのもので、奈良時代末の影響が色濃く残り外面調整にヘラケズリ（ｃ手法）が盛行する段階から、ナデとオサエを主体とした手法（ｅ手法）への変化、椀・杯・皿といった器形の種類と各段階の法量分布などが提示され、年代観の根拠が示された。この編年案は、今回検討した修正案とも大きな齟齬は無く、平安時代前期の土器編年はここに基礎がつくられた。

90年代には調査データは膨大な量となっており、土器全体の流れを明らかにしようという動きが起きる。1994年にまとめられた『平安京提要』では、土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器などの平安時代の土器についてのそれぞれ考察が掲載され[18)]、一つの集大成と評価できる。1995年、伊野近富氏は「中世土器の編年（上）」、「１．土師器」を発表し、「洛外」と呼ばれる市街地周縁部で生産されたものを「京都」の土師器皿とし、10世紀～18世紀の土師器の編年観を示した[19)]。1998年になると鋤柄俊夫氏が宇野・伊野・横田各氏の編年観を踏襲した京都の土器編年を示し、畿内の土器から地域社会について考察した『中世村落と地域性の考古学研究』を発表した[20)]。

【京都市埋蔵文化財研究所編年案とその課題】

1996年には京都市埋蔵文化財研究所内での調査検討の結果、小森俊寛・上村憲章氏が「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」を提示した[21]。この編年案の特徴の一つは法量分布の可視化と言え、形態変化と法量分布を両輪として土師器皿の各段階の様相が考察された。以後、京都市および京都市埋蔵文化財研究所ではこの編年観を基準として今日まで発掘調査を行ってきた。また、近世以降の土師器皿については2004年刊行の『平安京左京北辺四坊－第２分冊（公家町）－』に所収された小松武彦氏の「近世の土師器皿[22]」を刊行以降基準としている。

なお、これまでに伊野氏をはじめとした他の編年案を使用してこなかった理由は以下のとおりである。

１．白色土器が土師器の一分野として分類されているなど分類構造に混乱が見られる

回転台による成形で胎土が白いという特徴を持つ白色土器は「土師器」・「須恵器」などと同様“器種”に該当する分類項目であり、土師器の中の１類型とすべきではない[23]。

２．分類設定が土師器皿の実態に合わない

伊野氏分類の大きな功績は、個体差が大きい土師器皿の特徴を単純化し、成形技法による形の変化を明瞭に説明した点にあり、その点は評価される。しかし、例えば「二段ナデ」と説明する10世紀後半～13世紀代の土師器皿（本分類ではN）はＡ・Ｊタイプに分けられているが、口縁部ナデの強弱と範囲の変化は時間とともに漸移的に変わるため、実物・完形の皿には、片端はＡタイプ、反対の端部はＪタイプといった特徴のものが散見される。この欠点については伊野氏も述べているが、形でタイプ分類をする方法論は、大きな変化の枠組を細分していく時に、京都の土師器皿の実態と乖離してしまう傾向がある。

３．系列の配置を誤認している

系列についての考えは次に平尾政幸氏によって示されるが、京都の土師器皿は、大きく括ると三系列に集約される。古代から続く皿Ａとそこから派生した皿Ｎの系列（横田氏：褐色系）、鎌倉時代から見えてくる皿Ｓ（同白色系）の系列である。変化は連続しており、その連続性は図からも読み取れる。特に中世後期の浅くなった皿Ｓが皿Ｎの続きに配置されている編年案を見ることがあるが系列を誤認している。

４．法量分布の変化を軸としていない

漸移的にすすむ土師器皿の変化を認識するためには、法量分布の変化の把握が不可欠であり、形態の特徴と法量変化は車の両輪と言える。

以上のような考えで、京都市および京都市埋蔵文化財研究所は、これまで1996年の小森・上村編年を基準としてきた。しかし、発表されてから20年以上が経過する中、調査成果と合わない部分や年代観、方法論上の疑問が内部で蓄積されていた。また、森島康雄氏から指摘された烏丸線№46濠１出土土器の年代観の問題[24]も検討されておらず、今回の再検討会が生まれた。

なお、2005年に小森氏が『京から出土する土器の編年的研究[25]』で編年案を発表しているが、平安時代から中世にかけては大きな変更が無く、混乱をさけるため1996年の編年を使い続けてきた。今回の再検討会の結果、小森・上村編年からの大きな変更点としては、恣意的に区分した各段階は均等な時間幅を持つ方が歴史の中の様々な事柄と比較し易いと考え、30年の幅としたこと、これまでのⅤ期とⅧ期の３段階区分が２段階区分になったことなどがある。

また、上記の問題点を修正した年代観については平尾氏が『平安京左京四条二坊十四町跡[26]』ですでに発表しているが、表以外の説明が無く適用を控えていた。このたび、ようやく有志によって蓄積された問題を再検討する機会を得た。その成果については次に平尾氏が論じる。

最後に、研究史をまとめるにあたっては、柏田有香氏、新田和央氏、平尾政幸氏をはじめ京都市文化財保護課と京都市埋蔵文化財研究所の職員から協力と助言を得た。また尾野善裕氏、水橋公恵氏には試案の段階から多くの御指摘と御助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

森谷尅久・井上満郎「平安京研究の歴史と課題」『平安京提要』角川書店　1994年
浪貝　毅「考古学からの平安京研究」『平安京提要』角川書店　1994年
古代の土器研究会『古代の土器３・都城の土器集成Ⅲ』 1994年

註

１）岩井武俊「平安京大極殿碧瓦の布目に就きて」『考古界』第六篇第一〇号　1908年、広瀬都巽「山城国紀伊郡柳原庄発掘の古瓦」『考古学雑誌』第一巻第八号　1911年

２）西田直二郎「淳和院舊蹟」『京都府史蹟勝地調査會報告』第八冊　京都府　1927年、後に『京都史蹟の研究』吉川弘文館　1961年に再録

３）『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十冊　京都府　1929年

４）『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十九冊　京都府　1939年

５）角田文衛・藤原光輝・上田早苗「古代史ニュース　勧学院址の発掘調査」『古代文化』第一巻第五号　1957年

６）「附尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第10冊　奈良国立文化財研究所　1961年

７）杉山信三「鳥羽田中殿跡の発掘調査」『院の御所と御堂―院家建築の研究―』奈良国立文化財研究所学報第11冊　奈良国立文化財研究所　1962年

８）「平安京大内裏発見の緑釉土器」『古代学研究』第29号　1961年、「京都市待賢小学校前遺跡発見の緑釉陶器とその他出土資料」『古代文化』第十五巻第二号　1965年ほか。その詳細は『坂東善平収蔵品目録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1980年を参照。

９）『平安博物館研究紀要』第３輯　平安文化の研究２　財団法人古代学協会　1971年

10）『平安京跡発掘調査報告書』平安京調査会　1975年

11）松藤和人「同志社キャンパス内出土の土器・陶磁器の編年」『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社校地内埋蔵文化財調査報告　資料編二　同志社大学校地学術調査委員会　1978年

12）伊野近富「平安京跡（左京内膳町）昭和五五年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1980-３』京都府教育庁指導部文化財保護課編　京都府教育委員会　1980年

13）宇野隆夫「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ－白河北殿北辺の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター　1981年

14）横田洋三「出土土師器編年試案」『平安京左京五条三坊十五町』平安京研究調査報告第５輯　財団法人古代学協会　1981年

15）横田洋三「土師器皿の分類と編年観」『平安京左京四条三坊十三町－長刀鉾町遺跡－』平安京跡研究調査報告第11輯　財団法人古代学協会　1984年、横田洋三「土師器皿（Ｂタイプ系）の器形、規格の変化と製作技術について」『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告第12輯　財団法人古代学協会　1984年

16）川西宏幸「土器の年代および土師器の法量変化」『平安京左京八条三坊二町』平安京跡研究調査報告第６輯　財団法人古代学協会　1983年、堀内明博「瓦器成立以前の平安京の土器」『中近世土器の基礎研究Ⅰ』日本中近世土器研究会　1985年、伊野近富「「かわらけ」考」『京都府埋蔵文化財論集　第１集　－創立五周年記念誌－』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987年

17）平尾政幸「平安時代前期の土器」『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1990年

18）角田文衛編『平安京提要』角川書店　1994年

19）伊野近富「土師器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995年

20）鋤柄俊夫『中世村落と地域性の考古学的研究』同志社大学博士論文　1998年、後に『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社　1999年に所収

21）小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第３号』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

22）小松武彦「近世の土師器皿」『平安京左京北辺四坊－第２分冊（公家町）－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

23）「白色土器」が一器種として扱われるべき特殊な土器であることについては平尾政幸「白色土器」『平安京提要』角川書店　1994年に詳しい。

24）森島康雄「織豊期の基準資料と暦年代の再検討－京都を中心に－」『織豊城郭　第７号』織豊期城郭研究会　2000年

25）小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開－』（有）京都編集工房　2005年

26）平尾政幸・山口　真『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年